

	課題分析	授業改善策	改善状況
国語	(1) 進出漢字が定着せず、語彙力が不足していて、自分の考えや感情を具体的に表現することの苦手な児童がいる。 (2) 文章を書くことを苦手としている児童が多い。特に、自分の考えを述べることやわかりやすい構成を考えて記述することが苦手である。 (3) 読書に対して、積極的な児童と消極的な児童の差が大きい。	(1) 新出漢字の指導で、正確な筆順を定着させる。また、家庭学習やタブレットのドリル学習を活用しながら習熟を図っていく。 (2) 日常的に様々な学習場面に書く活動を取り入れ、書くことに対する抵抗感をなくしていく。互いの作文を読み合う活動などを授業に取り入れ、相手意識を高めていく。 (3) 読書活動の時間を確保する。読書の幅を広げる働きかけとして担任が本を紹介したり、総合的な学習の時間と関連させたりしていく。	
社会	(1) 地図帳や地球儀、資料集の扱い方、世界の海洋や大陸、日本の国土の位置など、正確な知識が未定着の傾向がある。身に付けた知識や気付いたことを言葉にして表現する力に個人差がある。地図記号、八方位、縮尺等の読み取り、資料の読み取りが十分でない児童もいる。 (2) 資料から事実だけを選び取ることや、読み取った事実から自分の考えを導き出すことについては課題がある。 (3) 主体的に問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を高めていく必要がある。	(1) 地図帳や地球儀、統計などの各種基礎的資料を、フラッシュカードやデジタル教材等を効果的に活用することで知識の定着につなげていく。 (2) 資料の見方を指導し、数値の変化や他の資料との共通点や相違点などに着目し、自分の考えをまとめることができるような活動を多く取り入れる。また、発問で考えを引き出していく。 (3) 社会の課題について、課題解決のために、調べたことや考えたことを基に話し合う活動を充実させる。	
算数	(1) 問題を解決しようとするときに、既習の知識・技能を意識していない児童が多い。 (2) 計算そのものを公式の適用に留まり、計算の意味の理解に至っていない児童が多い。主に、乗法・除法を含む単位では、計算の意味の理解、二つの数量関係を捉える力を育成する指導方法の工夫が必要である。	(1) 既習の知識・技能を用いて未習事項も解決しようとする態度を養うために、□を用いた問題場面を設定したり、既習の知識・技能を活用している児童の考えや発言を価値付けしたりする。 (2) 問題の解決を式のみで指導することのないように、児童の実態の把握を行い習熟度に応じた図を活用する。式と図を板書し、関連させながら思考する時間を確保する。	

	(3) 「簡潔・明瞭・的確」に問題を解決することのよさを実感していない児童が多い。自己の問題の解決の過程を振り返ったり、他者の考えと自分の考えを比較したりすることにより、よりよいものを求めるという点で、学ぶに向かう力、人間性等を育成する指導の工夫が必要である。	(3) よりよいものを求めようとするためには、問題の設定が重要である。そのために、具体物を用意する等の教具の充実を図ったり、ICTを活用したりする。発展性を見いだせるような場面に問題に設定する。その中で、問題を解決した過程を振り返ったり、他者の考えと自分の考えを比較したりすることにより、よりよいものを求める良さに気付かせる。	
理科	(1) 観察・実験には意欲をもって取り組むが、問題を見出す力に差が大きくあった。そのため、観察・実験の目的や見通しをもたないまま取り組んでいる児童が多く、正しい知識や技能が身に付かないことがあった。 (2) 観察・実験そのものを楽しむことに終始し、観察・実験の方法や結果のまとめ方、考察が課題からずれることが見られる。 (3) 学習を生かす場面が授業内に留まっている児童が多い。	(1) 導入での課題提示の仕方や資料を工夫し、課題意識と課題解決の見通しをもって取り組めるようにする。また、観察・実験の試演をしたり、方法の確認をしたりすることで、正しい観察・実験の仕方や器具の扱い方を身に付けられるようにする。 (2) 予想 - 観察・実験 - 結果 - 考察 - 結論という授業の流れを確立する。また、自分の考えを書くときは、結果は表やグラフなどを用いて事実のみを簡潔に記述し、考察は結果からわかる共通性や規則性を見出すことを示していくことで、思考力や表現力を伸ばしていく。 (3) 観察・実験の後や単元のまとめの時間などに、実験結果や知識を活用したり、適用したりして解く問題を設定することで、知識や技能を活用する力を伸ばしていく。	
音楽	(1) 和音のはたらきについては、様々な楽曲を通して繰り返し、感じ取っていく必要がある。また、歌唱では、響きのある歌い方が身に付いていない児童がいる。 (2) 表現の工夫では、どのような音楽にしたいか、明確に思いや意図をもっている児童もいるが、もてていない児童もいる。 (3) ペアでの聴き合い活動を含め、課題を見つけ主体的・協働的に学習に取り組む	(1) 旋律だけの演奏と、和音や低音を合わせた演奏と、比べて聴く活動を取り入れる。歌唱の学習ができる期間は、感染対策を十分に講じた上で、呼吸や体の使い方について理解できるようにし、歌って試すようにする。 (2) どのように演奏するとよいか音楽的根拠をもとに試すことを繰り返すことで、曲や演奏のよさを見いだせるようにする。 (3) それぞれの表現や発表のよさを認め合う体験を積み重ね、表現する喜びを	

	む児童が多い。高学年になり、表現することを恥ずかしがる児童も出てきている。	味わうことができるようにする。	
図 画 工 作	(1) 筆や刷毛、へら、のこぎり、彫刻刀などの道具を活用して意欲的に作品づくりに取り組んでいるが、安全意識に課題のある児童も一定数いる。 (2) 豊かに発想・構想できる児童は多いが、特に立体作品をつくるときに時間がかかりすぎる児童が多い。 (3) 図画工作が好きな児童が多く、主体的に課題に取り組む姿が見られる。鑑賞で見方を深めるところにまだ課題がある。	(1) 安全に使えるよう一層の声掛けを行う。高学年から始めた電動糸ノコギリやペンチなどの道具を扱う機会を充実させ、技能の習熟を図る。また、既習の道具も複数の課題で使用することで、技能を高めていく。 (2) 時間を意識するように声かけする。また、道具の使い方に徐々に習熟できる課題を経験させる。 (3) 鑑賞の視点をあらかじめ提示することで、他者の作品や自分の作品の見方を深めることができるようにする。	
家 庭	(1) 学習に対して、関心・意欲が高い児童が多い。また、身に付けた技能を生かして、家庭で実践しようとしている姿も見られる。(特に、裁縫 小物作り) 家庭生活での生活体験の違いから、個人差も大きい。 (2) 家庭での生活経験の差から自ら課題を見だし、課題を設定することが難しい児童の姿が見られる。 (3) 家庭生活に生かし、生活を工夫する場面が作りにくい。特に調理実習は、感染症対策で今後も実習は厳しいため、座学のみとなってしまう。	(1) 学習した内容の定着を図るため、家庭との連携を密に図り、児童が学習した知識や技能を日頃の家庭生活中で生かせるようにする。 (お手伝いカードやお小遣い帳等) タブレットで実習動画を視聴したり、静止画で動きを確認したりすることで、感染症対策を行いながら学習をすすめる。(ICT の活用) (2) ワークシートを活用し、課題設定や解決方法を自ら考えられるようにする。また、授業後に振り返りを行うことで、実践の評価・改善を行い、主体的に学ぼうとする態度を養う。 (3) 学習内容の定着を図り、家庭生活の中で繰り返し実践できるように、長期休業などには課題として設定するなど、家庭で実践できるような場を設定する。(お手伝いカード等)	
体 育	(1) 日常的な運動や遊びの経験の違いから体力の個人差が大きい。 それぞれの運動の領域によっては、知識、技能ともに個人差が大きい。 (2) 個人の課題解決のために、工夫して運	(1) 運動の特性に応じて、楽しさを十分味わえるような学習過程や指導方法の工夫を行う。また、児童が動きのポイントを理解し、タブレットをはじめとする、ICT 機器を有効活用しながら、互いに学び合える環境をつくる。 (2) 学習カードを活用し、児童一人一人が	

	動する力が身に付いていない。 (3) 約束やルールを守り、助け合って運動する態度が身に付いている。運動に対する関心が個々のもつ体力や技能に影響を受ける様子が見られる。	自分に合った課題を設定し、目的意識をもって運動に取り組み、課題解決するための手立てを工夫したりできるようにする。 (3) 縄跳びや鉄棒、持久走など、休み時間でも児童が自主的に運動に取り組めるように学習カードを活用して、運動の日常化を図る。	
外国語	(1) 学校の外で学習している児童と、そうでない児童で差が見られる。昨年度までの内容が定着している児童とそうでない児童の個人差が大きく、4年生の学習内容の基礎的・基本的な学習内容の定着も図る必要がある。 (2) 日本語にはない発音を上手く発音することに苦手意識をもつ児童が多い。聞こえた音を繰り返すことはできるが、文字や写真を見て正しくそれにあった外国語を発音できる児童は少ない。 (3) 大半の児童が、毎回の学習のめあてに向かって積極的に学習に取り組んでいる。外国語の学習に自信のない児童は、途中で取り組みを諦めてしまう様子も見受けられる。	(1) 毎回の学習を始める前に前回までの復習を取り入れ、学習内容の定着を図ることができるようにする。 (2) I C Tをフラッシュカードの要領で効果的に使い、外国語から日本語、日本語から外国語に学習した単語、新出単語を言えることができるように繰り返し復習していく。ALT を効果的に活用し、ネイティブの発音でたくさん練習を重ねることで外国語特有の音声を発音することができる活動を取り入れる。 (3) 各単元のめあてを提示し、児童が見通しをもって学習することができるよう工夫する。児童が楽しく活動しながら外国語を学習できるよう教材研究を行い、効果的な学習活動を取り入れる。	